

中学生用制御焦点尺度の作成

—RFQ (Regulatory Focus Questionnaire) に着目して—

海沼亮¹ 外山美樹² 長峯聖人³ 湯立⁴ 三和秀平⁵ 相川充⁶

^{1, 2, 3, 4, 5, 6} 教育テスト研究センター ^{1, 3} 筑波大学大学院人間総合科学研究科

^{2, 4, 6} 筑波大学人間系 ⁵ 信州大学学術研究院教育学系

制御焦点の個人差を測定する代表的な尺度の1つに RFQ (Regulatory Focus Questionnaire) がある。本研究の目的は、中学生の制御焦点を測定することのできる尺度を RFQ に基づいて、開発することであった。中学生 287 名を対象に調査を実施した。因子分析の結果、中学生の制御焦点は、「防止焦点」と「促進焦点」の二因子から構成されていることが示された。さらに、制御焦点と行動抑制系 (BIS)、行動賦活系 (BAS)、遂行回避目標、遂行接近目標との関連を検討したところ仮説に沿った結果が確認された。以上の結果から中学生の制御焦点を測定する尺度を理論に沿った形で開発することができたものと考えられる。

キーワード：制御焦点理論, RFQ (Regulatory Focus Questionnaire), 防止焦点, 促進焦点, 中学生

1. 問題と目的

制御適合理論 (regulatory fit theory ; Higgins, 2000) では、義務や責務を成し遂げることに焦点化した「防止焦点」と理想や夢の実現に焦点化した「促進焦点」という2つの制御焦点に合致した方略を活用することで、制御適合を経験することにつながり、活動へのエンゲージメントが向上することが仮定されている。さらに、近年では、実証的研究においても制御適合によって、パフォーマンスが向上することが示されている (e.g., 外山他, 2017)。このように、個人の制御焦点の在り方は、パフォーマンスなどの学習場面における重要な変数と密接に関連しているため、制御焦点の個人差に着目する必要があると考えられる。

制御焦点の個人差とは、個人の特性的な防止焦点の傾向の強さと促進焦点の傾向の強さを測定することに相当する。制御焦点を測定する代表的な尺度の1つに、「RFQ (Regulatory Focus Questionnaire ; Higgins et al., 2001)」がある。RFQ とは、防止や促進に関する養育や過去の教育経験を重視した項目から構成されている尺度であり (Summerville & Roese, 2008)、先行研究において信頼性や妥当性が確認されていることが指摘されている (Hodis, 2017)。そこで、本研究では、制御焦点を測定する尺度として、RFQ に着目する。

そして、Hodis & Hodis (2016) は、RFQ の項目を一部修正し、子どもにも適用可能な制御焦点尺度の開発を試みている。学齢期の子どもを対象とした調査の結果、防止焦点と促進焦点は、制御焦点理論に沿った無相関であったことに加え、2 因子構造のモデル適合度や各項目への負荷量も十分であったことを報告している。こうした結果から Hodis & Hodis (2016) は、原尺度を一部修正することで、防止焦点と促進焦点を弁別して測定することが可能であると結論付けている。

このように、子どもを対象とした制御焦点に関する研究は徐々に増えてきているものの

本邦の子どもを対象に、制御焦点を測定する尺度の開発を試みた研究は見受けられず、本邦の子どもを対象とした制御焦点に関する知見は不足している。そこで、本研究では、本邦の子どものなかでも中学生を対象に調査を実施し、中学生の制御焦点を測定することのできる尺度をRFQに基づいて開発することを目的とする。

なお、尺度の妥当性は、外山・長峯・湯・三和・相川（2016）に沿い、行動抑制系（BIS）・行動賦活系（BAS）、遂行回避目標、遂行接近目標との関連に基づいて確認する。具体的には、外山他（2016）の結果を踏まえると、防止焦点は、BIS、遂行回避目標と正の偏相関、促進焦点は、BAS、遂行接近目標と正の偏相関が認められることが予想される。

2. 方法

2.1 調査協力者

関東地方の中学生 287 名（男子 134 名、女子 145 名、無回答 8 名；中学 1 年生 131 名、2 年生 156 名）が調査に回答した。なお、共分散構造分析による確認的因子分析では、完全情報最尤法によって欠測値を補填し、その他の分析では、分析ごとに欠測値を除外した。調査は、著者らの所属する大学の研究倫理委員会の承認を得たうえで、実施した。

2.2 調査内容

①基本属性：性別と学年について記述する形で回答を求めた。②制御焦点尺度の項目原案：先行研究（遠藤，2011；外山他，2016）を参考に、防止焦点 5 項目、促進焦点 6 項目を作成した。各項目について 4 件法で回答を求めた。③高橋他（2007）の日本語版 BIS・BAS 尺度を用いた。4 件法で回答を求めた。④遂行回避目標、遂行接近目標を測定する尺度：田中・山内（2000）の達成目標志向性尺度を用いた。6 件法で回答を求めた。

3. 結果と考察

制御焦点尺度の項目原案に対して、最尤法による探索的因子分析を実施した。次に、固有値の減退状況および因子の解釈可能性に基づき、2 因子解を指定し、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、十分な負荷量（.40）を示さなかった 2 項目が確認されたため、当該の 2 項目を除外したうえで、因子分析を実施した。その結果を Table 1 に提示した。なお、2 因子で説明可能な分散の総和は、59.57%であった。第 1 因子は、「おうちの人のいうことを守るようにしている。」などの項目が高い負荷量を示したため、「防止焦点」と解釈した。第 2 因子は、「私は、いろいろ挑戦してみて、成功したことがよくある。」

Table 1 中学生用制御焦点尺度の探索的因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

項目	F1	F2	h^2	M	SD
防止焦点 ($\alpha=.80$)					
おうちの人のいうことを守るようにしている。	.81	-.03	.64	2.96	.77
おうちの人が「してはいけない」と言うことはやらない。	.72	.06	.57	3.01	.75
おうちの人がよく思わないことはやらない。	.72	.05	.55	2.87	.83
おうちの人を怒らせないようにしている。	.64	-.11	.36	2.88	.88
促進焦点 ($\alpha=.78$)					
私は、いろいろ挑戦してみて、成功したことがよくある。	-.13	.92	.76	2.67	.86
頑張ろうとやる気になったことで、成功したことがよくある。	.04	.77	.62	2.82	.89
私は、大切なことをするとき、うまくできると思うことがよくある。	-.08	.57	.29	2.80	.82
私は、いつも成功できるように頑張っている。	.27	.46	.40	2.97	.80
私は、好きになったり、やる気になったりするような活動や趣味をよく見つける。	.10	.44	.24	2.96	.96
因子間相関		.45			

ある。」などの項目が高い負荷量を示したため、「促進焦点」と解釈した。その後、因子間相関を仮定した共分散構造分析による確認的因子分析を実施した。その結果、モデル適合度は、 $\chi^2(26) = 68.01$ ($p < .05$)、CFI=.95、RMSEA=.08であり、本研究で仮定したモデルのあてはまりの良さが概ね確認された。続けて、尺度の信頼性を確認するため、Cronbachの α 係数を算出した結果、良好な値が確認された (Table 1)。したがって、本研究で新たに作成された中学生用制御焦点尺度も制御焦点理論に沿った2因子構造から構成されるものと考えられる。

また、各尺度の加算平均値を尺度得点として、防止焦点および促進焦点とBIS、BAS、遂行回避目標、遂行接近目標との間の偏相関係数を算出した。その結果、防止焦点とBIS ($pr=.17$, $p < .01$)、遂行回避目標 ($pr=.28$, $p < .01$)、遂行接近目標 ($pr=.24$, $p < .01$)との間に有意な正の偏相関が見られた。また、促進焦点とBAS ($pr=.57$, $p < .01$)、遂行接近目標 ($pr=.31$, $p < .01$)との間に有意な正の偏相関が見られた。以上の結果は、本研究の仮説を概ね支持するものであり、新たに作成された中学生用制御焦点尺度の妥当性の一部が確認されたといえる。よって、本研究で開発された尺度を用いることで、中学生の制御焦点について検討することが可能になるものと考えられる。

本研究の限界と今後の展望として、制御焦点の間に、相関関係が確認されたことが挙げられる。制御焦点に関する先行研究では、防止焦点と促進焦点の間に、相関が認められないことが多く報告されている (e.g., Higgins et al., 2001) もの、本研究で開発された中学生用制御焦点尺度には、因子間相関が確認された (Table 1)。したがって、子どもの制御焦点の発達の様相について研究を進めていく必要があるものと考えられる。

引用文献

- 遠藤 由美 (2011) 制御焦点尺度日本語版の検討 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 206.
- Higgins, E. T. (2000) Making a good decision: value from fit. *American psychologist*, 55:1217-1230.
- Higgins, E. T., Friedman, R. S., Harlow, R. E., Idson, L. C., Ayduk, O. N., & Taylor, A. (2001) Achievement orientations from subjective histories of success: Promotion pride versus prevention pride. *European Journal of Social Psychology*, 31:3-23.
- Hodis, F. A., & Hodis, G. M. (2016) Assessing motivation of secondary school students: An analysis of promotion and prevention orientations as measured by the Regulatory Focus Questionnaire. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 35:670-682.
- Hodis, F. A. (2017) Investigating structure of regulatory focus: A bifactor analysis. *Personality and Individual Differences*, 109:192-200.
- Summerville, A., & Roese, N. J. (2008) Self-report measures of individual differences in regulatory focus: A cautionary note. *Journal of research in personality*, 42:247-254.
- 高橋 雄介・山形 伸二・木島 伸彦・繁樹 算男・大野 裕・安藤 寿康 (2007) Gray の気質モデル——BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討—— パーソナリティ研究, 15:276-289.
- 田中 あゆみ・山内 弘継 (2000) 教室における達成動機、目標志向、内発的興味、学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, 71:317-324.
- 外山 美樹・長峯 聖人・湯 立・三和 秀平・相川 充 (2016) 学業領域における制御焦点尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究, 52:19-24.
- 外山 美樹・長峯 聖人・湯 立・三和 秀平・黒住 嶺・相川 充 (2017) 制御焦点が学業パフォーマンスに及ぼす影響 教育心理学研究, 65:477-488.

海沼 亮, 外山 美樹, 長峯 聖人, 湯 立, 三和 秀平, 相川 充